

異形の埴輪を追う～山名原口I遺跡出土盾持型埴輪について～

高崎市立第一中学校

2 学年 新井 世絆コーリン

研究のきっかけ

僕は埴輪と古墳が大好きで、県内外の古墳や博物館へ行っているいろいろ調べてきました。その中で初めてであった異形の埴輪に興味をわき、調べることにしました。

研究の方法

国立博物館や群馬県立歴史博物館へ行く
実際の遺跡へ行ってフィールドワークをする
文献を調べる



歯がある埴輪の展示



歯がある埴輪の復元したもの

参考にした資料と文献

高崎市史、群馬県古墳綜覧、令和4年度前橋・高崎連携事業文化財展～東国千年の都の資料、若狭徹著「埴輪」

① 埴輪について

僕が古墳と埴輪に興味を持ったのは、小学校3年生の頃でした。その頃から県内外の古墳や遺跡を見に行ったり、市内の群馬県立歴史博物館、観音塚考古資料館、かみつけの里博物館、高崎市歴史民俗資料館に何度も通い、東京国立博物館にも毎年行って、多くの埴輪を直に見て学びました。埴輪の起源は、弥生時代に祭りなどで使われたとされる特殊器台とされ、それから円筒埴輪が作られました。埴輪の主な意味は、古墳に眠る埋葬者を護ること。初期の円筒埴輪には、弥生時代の特殊器台にある魔除けの透かし彫りの名残が見られます。6世紀頃になると、群馬県では人物埴輪や動物埴輪、家や道具などの形象埴輪が盛んに作られました。

群馬県で出土した主な埴輪



名称	埴輪武装男子立像 挂甲武人
ステイタス	国宝
出土場所	群馬県太田市
年代	6世紀
大きさ	130.5cm

その他特徴 綿貫観音山古墳の出土品が国宝になるまでは、唯一の国宝埴輪。非常に写実的な作りで、細かいところまで当時の鎧などを表現している。



名称	埴輪三人童女
ステイタス	国宝
出土場所	群馬県高崎市 綿貫観音山古墳
年代	6世紀
大きさ	約100cm

その他特徴 1つの台座の上に3体の女性の埴輪がならぶ埴輪は、国内唯一。弦をはじいている様子を表していて、背中には鏡と思われる丸い板を背負っている。

群馬の埴輪の特徴

群馬の埴輪の主な特徴は、①人物や動物などを模した埴輪が多く、特に馬型埴輪が多い。②埴輪の作りが非常に写実的で、当時のファッションや生活がよくわかる。③三人童女のように、非常に独創的で類を見ないようなデザインの埴輪を作っている。

令和4年度前橋・高崎連携事業文化財展～東国千年の都～で出会った異形の埴輪

高崎シティギャラリーで「前橋・高崎連携事業文化財展～東国千年の都」が毎年行われています。僕は毎年見に行っているのですが、令和4年度の展示の時、初めて見る異形の埴輪に出会いました。高崎市の山名原口Ⅱ遺跡で発掘されたその埴輪は、たくさん埴輪を見てきた僕でも見たことがない異様な物でした。

② 山名古墳群～山名原口Ⅱ遺跡とは～

まずは、異形の埴輪が見つかった山名原口Ⅱ遺跡を調べます。山名原口Ⅱ遺跡は、かつては古墳が60基以上あったとされる山名古墳群の中に位置しています。



高崎市指定史跡 山名古墳群



現在の山名古墳群分布図

所在地 高崎市山名町

時代 6世紀から7世紀頃古墳時代末期

ステイタス 高崎市指定史跡

規模 かつては古墳が60基以上あったとされるが、現在は19基ほど現存している

その他 前方後円墳や帆立貝型古墳も見られるが、小規模の円墳が多数あるため、主に古墳時代末期の群集墳であると考えられる。

山名原口Ⅱ遺跡



時代 6世紀から7世紀頃で、異形の埴輪が見つかった山名原口Ⅱ遺跡1号墳は6世紀頃に築造。上写真の古墳は山名原口Ⅱ遺跡2号墳で、7世紀頃築造。

出土品 山名原口1号墳からは、人物埴輪や動物埴輪、須恵器などが出土。2号墳からはガラス玉や勾玉、金属製馬具、耳環など。

特徴 異形の埴輪が出た1号墳はまだ石室を発掘していないので不明だが、2号墳は石室が開口していて、石室は丸い小石を模様のように積んだ模様積みになっている。

僕が考える山名原口Ⅱ遺跡

山名原口Ⅱ遺跡は、小規模円墳2基のみだけど、出土品が非常に豪華な渡来系の物であったり、石室が模様積みであったりすることから、埋葬された人物は渡来系の人たちで、模様積みの石室からしても、デザインなどが当時最先端の人たちではなかったかと考える。

③ 異形の埴輪～歯が生えた埴輪～

僕は、初めてこの埴輪を見たとき、今まで見てきた埴輪とまったく異なることに驚きました。この埴輪は頭部の一部分しか見つかっていませんが、その顔がこれまでの僕の埴輪の顔のイメージを覆しました。石英質の石で出来た歯を持つ埴輪など、日本で出土していなかったからです。

	埴輪の種類
	強面なことから、おそらく魔除けの意味の盾持ち型埴輪であると推定される
	出土場所
	山名原口Ⅱ遺跡1号墳
	時代
	6世紀頃
	大きさ
	見つかっている部分が少ないため、詳しくはわからないが、顔の部分だけでも大分大きいので、1メートル以上はあったのではないかと考える
	

この埴輪の異様な点

まず、目の部分が大きく開いて、つり上がっている点、次に、上の右側の写真で大きく開いた口には、石英質の石が歯のようにむき出しで並んでいる点、また、上の左側写真の高い鼻の穴の中にも石英質の石が埋め込まれている点、そして最後に、冠が3本の角のように立っている点が挙げられる。

ぼくが考えるこの埴輪の謎

僕がこの埴輪を見たとき、最初に思ったことは、鬼のようだ、ということです。目は見開いてつり上がり、口は横に開き歯をむき出しにして、鼻の穴を強調するかのように石を埋め込み、尖った角のような物が3本も頭の上に立っている。かみつけの里博物館にある盾持ち人埴輪は、もっとかわいい顔をしているのに、なぜこの埴輪はこのような恐ろしい表情なのか。僕はこの埴輪が作られたと思われる藤岡市の本郷埴輪窯跡に行き調べてみることにしました。

④ 藤岡市本郷埴輪窯跡

群馬県藤岡市は、群馬県内最大級の埴輪生産地で、この本郷埴輪窯跡付近に20基もの埴輪窯の遺構が見つかっています。出土品がすべて国宝となった高崎市の綿貫観音山古墳出土の埴輪も藤岡で作られたと推定され、あの唯一無二の三人童女も作られたと考えられています。

		所在地	群馬県藤岡市本郷
		ステイタス	国指定史跡
		時代	6世紀頃
		出土品	人物埴輪や動物埴輪など多数
		その他	このすぐ近くに土師神社と呼ばれる神社がある。祀られている神は、日本書紀に出てくる野見宿禰
		窯の特徴	
		窯の構造は全長約10メートル、幅1.8メートルの大型の登り窯で、窯の中から多くの埴輪が出土しています。この窯で焼かれたと推定される埴輪が、藤岡市内だけでなく、高崎市や伊勢崎市の古墳からも出土しています。	

この窯で埴輪を作っていた人々はどういう人たちだったのか

氏	土師氏：その名前から、古墳などの築造にも関わる、土を使った物を作る工人集団と考えられる
氏祖	土師氏の氏祖は、日本書紀に出てくる野見宿禰と言う豪族で、相撲の神となっている。
その他伝承など	日本書紀によると、野見宿禰は垂仁天皇に仕えていたが、垂仁天皇の皇后の葬儀の時、それまで行われていた殉死をやめさせ、その代わりに土で作った埴輪を古墳の周りに置いた、と言われているが、今日の考古学的見地からそれは史実ではないことがわかっている。しかし、その後野見宿禰は土師臣を授かり、土師氏の祖となった。

土師氏は渡来人？

土師氏は、その名前土がつくことから、土木系の技術を持つ氏業であることが推察されます。また、古墳築造と葬送儀礼を主に行う氏族でもあったようです。そのルーツは、古代に朝鮮半島から出雲あたりに入ってきた渡来人であることがわかっています。後に土師氏の名前は、菅原氏、秋篠氏、大江氏となったと言うことです。

埴輪から見た藤岡市の土師氏とは

綿貫観音山古墳出土の三人童女とその他埴輪群、山名原口Ⅱ遺跡1号墳出土の歯が生えた盾持ち人埴輪も、他に類を見ないデザインであること、細部にわたり非常に写実的な作りをしていることから、非常に高度な技術を持ちながら、独創的なデザインを使う、当時最先端のクリエイティブ集団だったのではないかと思います。

⑤山名原口Ⅱ遺跡出土の盾持ち人型埴輪と似ていると思ったもの

前にも書きましたが、山名原口Ⅱ遺跡1号墳出土の歯がある埴輪を見たとき、すぐに鬼のようだと思いました。でも、なぜ鬼のようなデザインなのか、そこにどのような意味があるのか、考えることにしました。そして、この埴輪と似ている、と僕が思う物が出てきました

似ていると思うもの① 追儼の方相氏



かみつけの里博物館で行われたかみつけ塾という考古学の講演会に参加したときのことです。大陸から伝わった「追儼」という古代の行事のことを知りました。追儼では、方相氏という、鬼のようなものが悪いものを追い払う儀式です。現在の節分の豆まきに似た儀式です。僕はこの方相氏が歯が生えた盾持ち人型埴輪に似ていると感じました。

方相氏と盾持ち人型埴輪の比較

方相氏		山名原口Ⅱ遺跡出土の埴輪
悪いものを追い払う	役割	古墳と埋葬者を悪いものから護る
大きく見開いた4つの目、頭には角が生え、口は大きく開いて恐ろしい歯を見せるような見た目	外見	大きなつり上がった目、鼻の穴に石を詰め、口を大きく横に開いて歯を見せている。頭には角のようなとんがった冠がある

似ていると思うもの② 藤岡の鬼瓦



藤岡市は鬼瓦が有名です。その造りは、非常に恐ろしい形相で迫力があります。この鬼瓦も、怖い顔を見せているという点で、歯がある埴輪に似ていると感じました。

鬼瓦との比較

藤岡の鬼瓦		山名原口Ⅱ遺跡出土の埴輪
魔除け、厄除け、家を護る	役割	古墳と埋葬者を悪いものから護る
頭には角、口は大きく開いて大きな牙が出ていて、目も大きくつり上がり、鼻の穴を大きく膨らませている。	外見	大きなつり上がった目、鼻の穴に石を詰め、口を大きく横に開いて歯を見せている。頭には角のようなとんがった冠がある

考察

僕は、山名原口Ⅱ遺跡出土の歯がある埴輪は、鬼を模して作られたのではないかと考えています。土師氏は渡来人であることから、大陸の文化を知っていたと思うし、追儼のことも方相氏のことも知っていたかもしれないと考えています。

結論とまとめ

僕は、埴輪の姿には大きな意味があると考えています。三人童女が一つの土台に3人乗っているのにも、何かとても大きな意味があると考えています。僕が研究した歯がある埴輪も、その姿になった理由が必ずあります。僕はそれが鬼に似ていると考え、追儼の方相氏や藤岡市の鬼瓦との比較と共通点を元に、歯のある埴輪は魔除けのための鬼ではないかと考えました。もしかしたら、日本のどこかにまだ歯がある埴輪が眠っているかもしれません。他にも見つければもっと研究が進むであろうと考えます。

この異形の埴輪の研究を通して

この研究を通して、僕は埴輪の世界の奥深さと古墳時代の精神世界を感じました。埴輪の持つ意味、古墳と埋葬者のために祈り護ること、渡来人の文化など考えることが出来ました。

最後に：日本国内で見つかった他の異形の埴輪



名称
両面人物埴輪
出土場所
和歌山県和歌山市大日山35号墳
時代
6世紀前半
ステイタス
国の重要文化財
特徴
背中合わせに二つの顔を持っていて、髪型が美豆良であることから、男性だと思われる。日本書紀に出てくる飛騨国の両面宿儺という鬼人をモデルにして作ったという説もある

この埴輪も非常に異様な埴輪ですが、何か大きな意味があって、この形で作られたと思います。いつかこの埴輪の調査もしてみたいと思います。